

初志の会の課題と方向

日 比 裕

一、個の育つ問題解決学習

本会は昭和六十一年の第二十九回夏季集会で「個を育てる教師の集い」という名称を会の別称として採択するという合意に達した。私も個を育てるというテーマに特に現代的な意義を認めたい。本会のこれまでの歩みや綱領から見れば、問題解決（学習）の語句を別称に入れてはどうかということは会員の多くが一度は考えたことであろうが、それは本会の結成の基本的な理念であり、いわば社会科の初志とほとんど同義であるということから、より今日的な「個を育てる」というテーマが採用されることにあった、と私は理解している。

したがって本会の今後の追究すべき課題ないし運動の方向は、教師が互いに手を取り合って個を育てる問題解決学習（あるいは自ずと個の育つ問題解決学習）を追究することであるといえるのではなかろうか。

二、子どもの生活の再建

自分の子どもも含めて私たちの身近な子どもを見れば、誰もがその生活経験の内実の希薄さ、過度に抽象化された生活に胸の痛む思いがする。なんとかしなければならぬ。子どもの生活の再建こそが私たち教育にかかわる者のもっとも緊要の課題である。

生活の再建とはなによりも自然とのかかわりにおいて、また社会的な人間関係において、子どもたちの生活経験が豊かになることである。個を育てるとは基本的に個々の子どもの生活の再建であり、子ども一人ひとりの生活経験がより豊かに具体的になることである。その意味で私たちは個々の子どもの生活全体を視野に収めて、その中で学校生活と授業のあり方を考えていくことがいまさらながら重要であると思うのである。自然に親しみ、地域社会の力動的な過程に積極的にかかわり、家族を中核とした近隣の人々との心の交流を深めてゆくことは子どもの生活の再建の過程であり、体験学習や総合学習も子どもの生活の再建という基本的理念の実現過程でなければならないと考えるのである。

三、カルテの実践の意義

ところで個を育てるというテーマの代表的実践校として静岡市立安東小学校がある。上田薫委員長の理論に基づくその実践はすでに本会の夏季集会の提案資料としても一再なら

ず取り上げられてきたし、すでに『どの子ども生きよ——カルテと座席表から「全体のけしき」まで——』や『個の育つ学校』（いずれも上田薫氏との共著、明治図書）などの著書が出されている。その影響は大きく、本会の多くの会員・誌友によって「カルテ・座席表」に集中的に表現される個を育てる教育が実践されている。

このカルテに基づく実践の優れたところはいうまでもなく徹底して個を把握しようとするところにあるが、特に注目したいのは、第一に子どもの生活全体をとらえようとするところである。それは子どもの生活の再建というテーマにしっかりと結びついているはずである。第二にカルテの思想に基づく教育実践が教師に教科の枠を超えさせるということである。

三十周年を迎えようとして今、本会の課題と方向を考えるに際し、約十年前の昭和五十二年の第二十回夏季集会における会員協議会の記録（本誌一一五号）を見ると、戸崎延子氏が安東小の実践にかかわって、次のような一教師の考え方の変化の事例を述べている。そこにカルテ実践の持つ上述の二つの意義を見ることができると思う。

「ある教師は国語科の授業に現れる子どもの発言や思考のみを追究していった。そして授業の組み立てにそれを活用した。しかし一年たつうちに彼女は、国語科という授業の枠を超えて子どもの全体を追うことの方へ心が傾いていってしまったのである。ただ授業のために授業の中だけで考えてもだめである。むしろ授業からはみ出した所にその子が抱える鍵があったと述懐する」（三三頁）

ここに見られる、個を全体として、教科の枠を超えて把握するという基本的な立場は現在まで一貫しており、安東小のみならずかなり多くの学校でより深く具体化されてきているのである。これは本会によって今後ますます発展されていくであろう。

四、授業研究の意義

しかし個を育てるという課題はいうまでもなくカルテの思想に専属するテーマではない。詳細な授業記録の分析による授業研究（授業分析）は昭和三十年代当初から子どもの思考の変容過程の分析を通して個性的思考のあり方を把握することを第一の課題としてきたのであり、それは本会の夏季集会の基底的テーマであり続けたといっても過言ではない。

そのような授業研究は一時間、多くて数時間の授業記録の分析が中心である。したがってそれで教育の実践的研究の全体をカバーすることはできない。カルテの思想は授業における子どものあり方をその生活全体の中に位置づけることによって、授業研究そのものを変革しようとするものである。

また教材研究は授業の中で具体化されるものであるけれども、それは教師の日常的な研究活動として、また授業の事前研究として行われる。たとえば私と三枝孝弘教授は愛知県額田町立宮崎小や新城市立東郷東小の協力のもとで日常的事例という概念を中心にした地域教材の発掘を手がけてきた（『日常的事例の発掘と社会科授業』明治図書）。谷川彰英氏

は地名を教材とした社会科単元の構成と展開を精力的に行ってきた（『地名に学ぶ——身近な歴史を見つめて——』『地名を生かす社会の授業』いずれも黎明書房）。また有田和正氏のユニークで魅力ある教材開発は多くの認めるところである。

このようなカルテの思想に基づく実践・研究や教材研究は授業研究と相対的に独立したものであるけれども、授業の実践・研究の立場からすれば、授業（研究）を補完するものと位置づけられよう。授業ないし授業研究はそうしたいろいろな教育研究が流れ込んで、そこで具体的に検討される場所なのである。私たちはこのような授業研究の持つ性格を十分評価しなければならないと考える。

五、集いのもちかた

以上のような実践・研究のあり方を「個を育てる教師の集い」において検討しようとするとき、具体的にどういう集会のもちかたが考えられるのでしょうか。

一つは、同一学級における社会科と他教科（たとえば国語や理科）の両授業を比較検討することによって、子どもの姿をより広く深くとらえるという形態が考えられよう。その場合、教科毎に存在する伝統的な教育論の展開のくせや特徴的な用語の使い方など、また特定の理論の影響等を討議の中でどう取り扱っていくかという問題が十分予想される。これは実際にはかなりやっかいな問題であろうと思われる。それは集会をスムーズに進行させることにはマイナスになるかもしれないが、他面、その問題を回避しないことは本会の議論の大枠を広げ、立場の多様性を深めることにあると考えられる。

先に挙げた昭和五十二年の本誌一一五号の「続々林間抄」で上田委員長は初志の会の今後十年に言及して、「昨今は内部論争が少なすぎるという感があるのである。外圧に対するためにその傾きが出るというのなら理解できぬこともないが、今日はどちらかといえば対外的には無風に近いのである。研究者諸君が成熟したことを計算に入れても、この状況は会の将来に対して樂觀すべき材料ではない。これから十年、会の惰性の上を歩むことは許されぬ」（四二―四三頁）と述べている。

私も少なくとも会内部での論争はしなかった。惰性の十年とってよい。十年がたった今、本会は外には「生活科」をむかえ、内には中核的会員層の退職時期をむかえ、大きな危機に立っている。私たちは本会の考え方の大枠が拡充する機会を積極的に具現化してゆく必要がある。

特定の教科に実践的、理論的興味を持つ者が共通の土俵で議論を発展されるのには、今一つ、総合学習を積極的に取り上げていくという方向が考えられる。単に低学年だけでなく中学年・高学年で総合学習を展開することは、子どもの生活の再建という基本的なテーマの実現にとっても重要である。

一つのテーマをその性格を生かして総合的に、また子どもの追究活動の諸側面を取り上げ、したがって当然に複数の教科的観点の含みこんだ学習過程として展開するという意味の総

合学習の検討に、各教科に研究的関心を持つものが参加することは自然なことである。

六、会の組織

すでに言及した本会の組織上の問題を避けて本会の今後を論ずることはできない。

先の「続々林間抄」で上田委員長はこの問題をこう述べている。

「二十年という区切りにおいて考えるのは、これからの十年をどう発展させるかということである。中枢のメンバーも、現場の人の多くは校長となり、なかには定年になった人もある。……一般的には会の老化はやはり危険なことと考えざるをえない。若い会員、とくに三十代の人たちの奮起を期待するゆえんである」(四二頁)

いまその十年目を迎えて、本会の中核メンバーの多くが力いっぱい日本の教育に貢献して第一線から退きつつある。しかしそれに続く五十代、四十代が十分にそのあとを引き継ぐまでになっているかといえば、五十代に入った私自身も含めて、あとは任せてほしい、と簡単にいえそうにない。本会の会員・誌友の数は表面的には会員の努力によって大きく減少しているとはいえない。しかし中枢部分の弱体化は覆うべくもない。

ここで私がいいたいのは、若返りの必要だけではない。退職を迎え、あるいは近く迎えようとしている会員がこれまでの役割を若い会員に任せて運営の全面から少し退くことがあっても、会員としての実質的活動を低下させないでほしいということである。会そのものを退くことはもちろん避けてほしい。

日本はますます高齢化社会になるという。その通りであるが、それだけに社会への直接的なかかわりの年月も長くなっていく必要がある。現在の社会は十分高齢化社会に対応するようになっていないが、私たちの会はこのことに早急に対応すべきである。本会は常に清新を求め、組織上の弾力性、力動性を求めるとともに、組織全体の力量を相対的に維持発展させていくことを考えねばならない。学校教育から退いても初志の会の戦線から離脱するという考えは持たないようにお願いしたい。」

本会の力量ということに関して、今一つの問題は、本会が長坂端午・重松鷹泰・上田薫・大野連太郎の各氏の呼びかけによって結成されたものであるところからもきていると思われるが、研究者グループの先導が強すぎ、実践者の方がどうしても会の運営において受け身になってきたということである。

これは実践者側よりも私も含めた研究者側の責任であるが、基本的には、会員の一人ひとりが会の真の主人公になることが重要であり、そのための会の組織と運営のあり方をじっくり考える必要があり、つぎの課題ともつながっていく。

七、上田理論の継承と発展

本会の今後の方向を考えると、上田理論の継承と発展の問題があるが、これは先に述

べた本会の議論の大枠を広げ、多様性をより深めるという課題と対立するものであろうか。これはむづかしい問題を含むが、おそらく上田理論がより広い土俵の上で、またより多様な立場から検討されることによって、その真価がいよいよ評価されていくことが予想されるのである。

すなわち上田委員長の著書・論文は本会の会員・誌友だけでなく、他の民間教育団体の会員や教育畑以外の人びとにも共感・共鳴の広がりから上田理論の一つの特質を理解するのである。

他方、初志の会にも上田理論に必ずしも全幅の理解と評価を示すことのできない会員・誌友のあることは当然である。また上田理論は思想的に深く鋭く純粋ではあっても、広さに欠けるのではないかという印象を持っている人も少なくはない。それらの点を念頭に置くとき、上田理論の継承と発展の課題は本会にとって重要かつおもしろ味のある問題であり、また個を育てるというテーマを全国集会やブロック別集会あるいは本誌を通してどのように発展させていくかという問題と密接に関連しているのである。

八、中学校社会科の問題

夏季集会やブロック別集会で中学校社会科の実践が取り上げられるようになってから十余年になるであろうが、まだ十分定着したとはいえない。

中学校社会科の実践と研究を本会として重視すべきであるという意見と、それに反対ではないがその発展の見通しがしっかりもてないという意見があるように思われる。

私は昭和六十一年五月二十五日専修大学で行われた民間教育諸団体による「第一回社会科問題シンポジウム」（初志の会から世話人は上田薫・市川博・影山清四郎の三氏）に参加し、神戸市立東灘高枚・大津和子氏の高一「現代社会」の実践（『社会科「解体論」批判―緊急シンポの記録と資料―』明治図書所収）を知って、中学校のみならず高校段階の社会実践に今まで以上に希望を持つようになった。

しかし中学校の先生方もいそがしい。先日も集会の提案資料を中学校から出してもらおうと、何人かの人に頼んでみて、あらためてその忙しさが理解できた。こうしたことも会としてどう対処していくべきか考えなければならないと思う。これは学校の活性化の問題につながっていくが、ここではその指摘にとどめたい。

九、教育評価の問題

最後にもっとも根底的でそれだけに困難な課題にふれたい。それは教育評価の問題である。これは一筋縄でとらえきれない問題であり、評価を種々なレベルに分けて、各レベルに応じた評価の方法を考えていくという方法論を展開すべきであると考えます。

すなわち単純な知識に属するようなこと（たとえば日本地図に東京の位置を記させるこ

と)をペーパーテストで問うという段階もあり、また地域社会のイメージを問うという段階、さらに子どもの全体的な学習態度を総合的にとらえるという段階もある。これらのことはすでに昭和三十九年の第七回夏季集会に取り上げられたことであるが、その後評価研究についてあまり大きな進展が見られないのは、いくつかのレベルの評価活動を子どもの思考の変容の把握という基本的な評価の観点から統一的にとらえようとしすぎたためではなかろうか。もっといろいろなレベルの評価活動を相対的に独立させて、もう少し気楽に実践を出していくことがよいのではなかろうか。

(本稿は私の学部で集中講座にきていただいた影山清四郎氏との雑談的討論から多くのものを得ていることを付記したい)

(名古屋大学教育学部)

『考える子ども』1987年1月号より

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』No.273, 2002年5月号, pp.122-127)